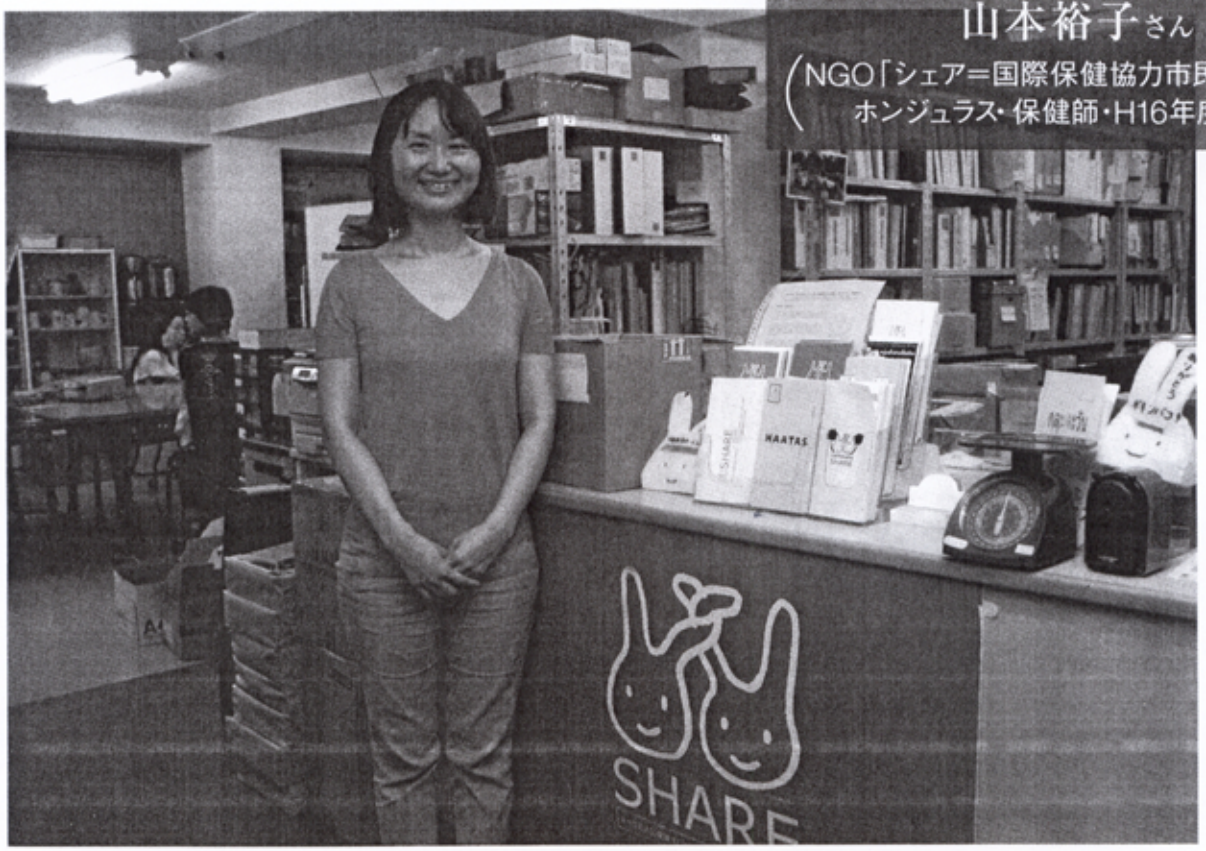
“日本在住外国人支援”
に活躍するJICAボランティア経験者

山本裕子さん
（NGO「シェア＝国際保健協力市民の会」職員
ホンジュラス・保健師・H16年度 1次隊）



東京・台東区にあるシェアの事務所で

多文化共生社会の下支え役として
人間の多様性を楽しむ心こそ多文化共生社会の原動力

〝外国人〟として暮らし、数々の困難に直面してきたJICAボランティア経験者こそ、日本で暮らす外国人のよきサポーターとなることが可能だ。

「健康保険にも入っておらず、支払いはできないだろう」。病院がそう判断し、脳障害が疑われるような状態でやってきた外国人の患者を、簡単な診察だけで帰してしまう。外国人女性がHIV検査で陽性だと判明したが、日本語が話せないからといって、病院が本人に断りもなく配偶者である日本人男性に告知をしてしまうことがある。離婚につながるかもしれないのに……。

超過滞在者を含め、現在日本で暮らす外国人は約220万人。そのなかには、「日本語が話せない」「経済的余裕がない」「健康保険に加入していない」といった事情がもとになり、医療に関して前述のような生命や人権の危機に直面するおそれのある人がいる。

保健師隊員として協力隊に参加した山本裕子（もとゆうこ）さん（35）が、医療の面で日本在住外国人が置かれている状況の本当の厳しさを知ったのは、帰国して2年後の2008年。保健医療分野で国際協力活動を行うNGO「シェア＝国際保健協力市民の会」でインターンをした際のことだった。それが契機となり、シェアに就職。現在は国内事業担当スタッフとして、日本在住外国人支援事業に携わっている。

日本在住外国人の健康問題そのものには、学生時代から関心を持っていた。在日ブラジル人に日本語を教えるボランティアに参加したことがきっかけで、彼らの健康問題に興味を持ち、学部では〝在日ブラジル人の健康支援〟について研究した。卒業後は、国立国際医療センターに4年間、東京・山谷地域で訪問看護を行うNPO法人「訪問看護ステーション・コスモス」に約半年、いずれも看護師として勤務。この時期、新宿の野宿者を支援する「新宿連絡会」のボランティアにも参加している。

さまざまな形で日本在住外国人とかかわっていった山本さんだが、〝本当に困っている外国人は途上国にいる〟という考えからなかなか抜け出せなかった。やがて協力隊参加を志望。ホンジュラスに保健師隊員として赴任し、保健所で保健ボ